

研究会通信

第28号 平成18年3月24日
特定非営利活動法人教育研究所・不登校問題研究会
〒233-0013 横浜市港南区丸山台2-26-20
☎045-848-3761(代)Fax045-848-3742
<http://kyoken.org/>

昨年度の第15回「教師&専門家のための不登校問題研修会」にご参加いただきまして誠にありがとうございました。

16回目を迎える今年の研修会も、尚一層充実した研修になるよう、現在準備を進めています。これからも変わらぬご支援のほど、心よりお願い申し上げます。



平成17年度夏期セミナー第15回

教師&専門家のための不登校問題研究会 講★義★概★要★&アンケートより

◆「軽度発達障害への支援と特別支援教育コーディネーターの役割」

京都府立丹波養護学校亀山分校 青山 芳文氏
〈講義より〉

特別支援教育の取り組みが始まり、「障害の種類と程度による適正就学を徹底し特別の場に教員を多数配置して、特別の先生が、特別の指導をする」ことが即、手厚い指導だと錯覚していたきらいのある教育現場に、「その子のニーズを把握して、必要に応じて特別の場も活用し、子どもに関わる人々が連携しながら適切に支援する」こと、「指導がその子に本当に合っていたかを吟味して進めること」(Plan-Do-See)が大切だという考え方が広がってきました。…

前年度まで京都府の教育委員会で障害児教育、特別支援教育を担当されてきた講師が軽度発達障害の子どもへの理解と支援についての事例を紹介しました。特別支援教育の展開の中でキーパーソンとして期待される特別支援教育コーディネーターの役割について提起されています。

〈アンケートより〉

- ▶ もっと継続して聞きたい。学校で仕事している者としてピリッとさせられる内容もあり、大変参考になった
- ▶ LD、ADHD、高機能自閉症など、発達障害をしっかり見極め、全校多勢で対応していくことの大切さがよく分かった。常識的な対応ではだめだということとかが、事例を聞く中でよく理解できた。
- ▶ 事例も多く、今関わっている生徒を頭に浮かべながら聞くことができ、理解しやすかった。

◆「高機能自閉症及びアスペルガー症候群の今日的理解」

京都大学医学部教授 十一 元三氏

〈講義より〉

心の問題という言葉がここ2,3年よく使われるようになってきました。青少年にまつわる現代の混乱が話題にのぼる時、決まったように心の問題として論じられます。しかし、青少年の精神の発達に関する問題は多彩であり、その領域(メンタルヘルス)は広大です。これら青少年の精神的問題すなわちメンタルヘルスには、心理的問題とならび、当然ながら脳機能の特徴に由来する問題が多く含まれているのです。…

講師は児童精神科医として、脳科学的見地から全ての精神的問題を“心の問題”一般化してしまうことへの危機感、“本来のメンタルヘルス”とは等について提起されました。二部構成講演の第二部では現在分かってきた高機能自閉症、アスペルガー症候群に関する最新の医学的見地も紹介して頂きました。

〈アンケートより〉

- ▶ 医療という専門的な面での講演を聞く機会がなかったので大変興味がありました。児童精神科医の専門医が少数であるのには驚きましたが、本来なら校医として学校に配置して欲しいくらいです。
- ▶ 医学的背景からとらえたアスペルガー等の理解により児童との対応、関係作りに一歩前進できたかなと思う。
- ▶ 臨床の面と病気の面との見分け方をしなければいけないことは、今までも考えていましたが、その根拠を学べたように思います。

◆「今、子ども達がおかれている社会環境を分析する」

大阪樟蔭女子大学人間科学部教授・
大阪市立大学名誉教授 森田 洋司氏

〈講義より〉

子どもの置かれている現在の社会状況を理解した上でどう取り組むのか、そのための姿勢、考え方を探っていきます。

その上で今の社会環境を子ども達の問題に即して捉えていくためのキーワードとして“私事化 privatization (プライバタイゼーション・民营化)”があります。社会制度上においては70年代から始まる民营化という流れ、80年代に入るとライフスタイルや行動においても“減私奉公”から“減公活私”型へ変わってきています。“組織や集団より個”私生活、さらには私自身の中に意味を見出そうとする動向として“意味探求社会”が登場してきます。…

“私事化”というキーワードから見える社会的背景・危機・問題行動へ対応する際の視点、対応のあ

り方まで幅広く社会学見地から解説して頂きました。今年も森田節は健在でした。

〈アンケートより〉

- ▶ 時代の流れによって子どもが抱えている問題の変容がよく分かりました。現代の大人でも人間関係がうまく築けない人も多いので、子ども達のおかれている社会環境が大人に通じていると思います。
- ▶ 直感的な支援に頼っていたが、きちんとした学びの機会を得てよかった。私事化優先社会において学校現場で意味のあるつながりを生徒に体験させてやりたいと思う
- ▶ 大人の視点、考え方を変えていかななくてはこれからの子ども達の心に寄り添っていけないのだと思いました。大人の今までの考え方は正しいなんて勝手に思い込まないよう、大人の規範にいれずに本当にその立場の何が必要か自分の考え方、自分にできることが何か、気づける自分でありたいと思いました。

◆「人間関係の改善を図るピア・サポート活動の実際」—不登校を誘発するいじめなどの対立問題への介入とその技法—

奈良教育大学教育実践総合センター
池島 徳大氏

〈講義より〉

ピア・サポート活動とは仲間同士の支え合い活動のことです。カナダ・アメリカ・イギリス等ではすでに30年以上前から子ども達が相談活動を実践していくために子ども達自身に①人間関係スキル②傾聴スキル③対立解消スキルの3つのスキルを教えています。日本でも①②のスキルは教育センターなどの研修でもよく取り上げられています。しかし、③のように揉め事やいじめ問題などにどのように介入していくのかといった研修のプログラムはあまり実施されていません。…

講師は演習の時間も取りながら、ここでいう3つのスキル①人間関係スキル②傾聴スキル③対立解消スキルについて具体的に解説されました。また、ピア・サポート活動の技法を丁寧に紹介して頂きました。

〈アンケートより〉

- ▶ 実際にエンカウンター実習もあって、非常によく分かりました。CCQ テクニックを参考に取り組んでいきたいと思います。
- ▶ 実際にスキルの取り方や介入の仕方など、現場に持ち帰ってすぐに実践したくなるような講義でした。
- ▶ イジメの指導観の話は印象に残りました。常に円筒においておきたいと思います。具体的な事例、ピア・サポートの活動の話など分かりやすかったです。

◆「教育に活かすカウンセリングの基礎基本」

兵庫教育大学教授 上地 安昭氏

〈講義より〉

カウンセリング研修とは教師にとってどんな意義があるのでしょうか。一つはコミュニケーションスキルの向上です。カウンセリングとはコミュニケーションそのものであり、言語的、非言語的スキルを用いてお互いの“思い”“考え”“欲求”“感情”を相互に伝え合い、理解し合うプロセスがコミュニケーションなのです。…

学校生活の限られた時間の中で行う時間制限カウンセリングという考え方、教師がカウンセリングをしていくために学ばなければならない具体的なスキル、(カウンセリングを行う教師のために)カウンセラーの基本事項などを分かりやすく丁寧に解説して頂きました。

〈アンケートより〉

- ▶ カウンセリングの難しさを改めて実感しました。カウンセリング学習というのは短期間で身につくものではなく、積み重ねが重要であり、それには現場の先生方はあまりに忙しすぎるのではないと思いました。
- ▶ カウンセリングの難しさを改めて感じました。方向性を的確にとらえるためにも傾聴をしっかり行うことの大切さを教えていただいたので、今後に活かしていきたいと思います。
- ▶ 生徒の言葉を傾聴する態度について学ぶことができました。これからの生徒との会話の中で活かして行きたいと思いました。

◆「社会環境の変化によって生まれた新しい不登校・ひきこもり」

不登校問題研究会代表幹事・
NPO 法人教育研究所理事長 牟田 武生

〈講義より〉

ニートと呼ばれる若者が厚生労働省の調査では52万人、02年内閣府の調査においては家事労働も含むと85万人とも言われています。一方“ひきこもり”の数は明確な統計はないものの100万人にも達するとの見方あります。日本のニートの原因として不登校からひきこもり、そのままニートに移行するケースも少なくありません。ひきこもりが長引くと自分の精神世界が大きくなる二次症状が現れます。そのことはいっそう学校や社会への適応を難しくしていくのです。…

不登校に対する様々な調査から見てきたデータをもとに近年になり増え始めた新しい不登校・ひきこもりの問題を提示していきました。また長年の臨床が裏づける子どものタイプの見分け方、具体的な対応の考え方も合わせて紹介していきました。

〈アンケートより〉

- ▶ ニートに関する内容、ネットゲームに関する内容などすばらしい考察に立った整理をされています。何度聞いても感心します。
- ▶ ただただ、卒業を目指す本校の取り組みに大きな不安を持ちました。どうすればよいのか…。
- ▶ 親の社会規範が壊れていること、低所得者ゆえに…、朝、子どもを起こさない、食べさせない家庭の増加、教育的支援のみではいけない、福祉の支援も必要との話、私が抱えている問題そのものです。こうした実態が増えています。小学生 100 人中 5 人弱が本校の現実です。いつ不登校になるかギリギリの線を歩いています。よい方法を教えてください。そして、親の考え方を育てる方法も教えてください。

◆「不登校に対する総合的な取り組み」

文部科学省初等中等教育局児童生徒課
課長補佐 倉見 昇一氏

文部科学省初等中等教育局児童生徒課課長補佐を講師に迎え、教育行政の現状と文部科学省の指針を“不登校児童生徒に対する柔軟な対応”“教育相談体制の充実”“教員の加配等”“教員の資質能力の向上”“いわゆる「ひきこもり」状態にある不登校児童生徒に対する対応”などのテーマに沿ってお話して頂きました。教育行政最先端のお話でした。

◆「児童福祉と次世代育成支援対策」

厚生労働省・児童健全育成専門官
鈴木 雄司氏

厚生労働省の児童健全育成専門官である講師をお招きし、最新の児童福祉政策、子育て支援プランを紹介して頂きました。不登校対策としても“児童館における不登校・ひきこもりモデル事業”についての取り組みなども明らかにして頂きました。最新の厚生労働省の動きも見える講義ノート 30 ページ近くに上る豊富な資料を添付しての講座でした。

◆「不登校への対応」—学校での取り組みを中心に— 明治学院大学心理学部教授 下司 昌一氏

〈講義より〉

1950 年代から現在の不登校に関する研究が始まります。1970 年代には“登校拒否”という言葉が一般化しました。さらに 1990 年代に入ってから“不登校”という言葉が用いられるようになります。登校したいのに登校できない子ども達の存在が認知され“登校拒否”は“不登校”へとその呼び名を変えていきます。…

中学校、小学校の教育現場から教育相談、スクールカウンセラーとして経験豊富な講師に臨床経験に基づき、様々な事例を交えながら現場に即した不

登校への対応、学校での取り組みについて分かりやすく解説して頂きました。

〈アンケートより〉

- ▶ 不登校の子どもに対する対応がよく理解できた。家庭・学校・地域がいかに連携することが必要かがわかった。
- ▶ 具体的な事例を挙げていくつかの形ごとの不登校についてお話して頂き理解しやすかった。自分が知っている子どもとの重なり、興味を持って聞くことができた。子どもへの対応だけでなく、その親へのアプローチ例も話して欲しいと思った。
- ▶ 特に他機関との連携について様々な情報を知ることが出来た。

◆「特別支援教育と軽度発達障害—理解と支援— 「ADHD」の子どもへの理解と対応について」

国立特殊教育総合研究所教育支援研究部
総合研究官 精神科医 渥美 義賢氏

〈講義より〉

今後の特別支援教育は従来の特殊教育の対象であった障害だけではなく、LD・ADHD・高機能自閉などいわゆる軽度発達障害にも積極的に対応していこうというのが大きな特徴のひとつです。さらに通常の学級でも支援の必要性があると考えられるお子さんの割合が 6.3%。またそのうち学習障害かもしれない割合が 4.5%、ADHD かもしれない割合が 2.5%、高機能自閉症かもしれない割合が 0.8%というチェックリストによる調査からわかってきます。…

精神科医でもある講師が特別支援教育と軽度発達障害について ADHD を中心に ADHD に対する理解から始まり、診断基準、病因、合併しやすい障害、経過と予後、さらには医学的治療などについて詳しくさらに具体的にお話をされました。また、教育的な関わり、対応についても言及していきます。豊富な資料も魅力です。

〈アンケートより〉

- ▶ ADHD と合併しやすい障害がよくわかった。
- ▶ 医学的に ADHD をどう捉えているのか、どのように対応しているのかが理解できた。高機能自閉症に関しても理解が深まった。
- ▶ ADHD についての資料が多くよかった。「変える」のではなく「身につける」という言葉が“なるほど”と納得できた。

◆「自閉傾向児、LD、多動児の心理と発達支援の方法」—幼児期の指導がきわめて効果的—

さいたま市教育相談センター所長
国際学院埼玉短期大学 客員教授 金子 保氏

〈講義より〉

自閉傾向がある子どもや、LD 傾向のある子ども達

の中に不登校が増えてきています。不登校が減少傾向にあるというのには疑問があります。もちろん多い少ないは問題ではありません。子ども達が将来不登校になるということを防ぐことが大切なのです。…

長年の臨床経験と徹底した調査研究の裏づけを基にお話される講師の理論には非常に具体性がありました。今年では自閉傾向児童、LD、多動傾向児童への発達支援について現場ですぐに役立つ方法を実例を交えながら分かりやすく話して頂きました。エネルギーにあふれる講演でした。

〈アンケートより〉

- ▶ 体を動かしながら事例を説明していただけたので情景を思い浮かべながら聞くことができた。仕事で場面緘黙の子と関わっているのですが、私には口を開くようになってくれたことを思い返して先生の話聞いて自信ができました。
- ▶ すばらしい話術で説得力があり、理解しやすかった。現場で日常に実践なさっているので体験からにじみ出る真実の言葉、ポジティブな姿勢に見習う点が多かった。来年も是非お願いします。
- ▶ カウンセリング法だけでない登校刺激という観点が新鮮であり、この会では様々な観点から講師を決めていただいていると分かり、ありがたかったです。

◆「熊谷市不登校半減計画の実際」

東京学芸大学教授 小林 正幸氏

〈講義より〉

不登校はなぜおこるのか、まずこの点を先にお話していきます。なぜ熊谷市でそのような実践をしているのか、この点を留意しなければ形だけを真似をしてもよくなりません。熊谷市ではここ3年間の取組を通して総欠席日数で約30%（6000日）ほど子ども達がより出席するようになりました。

不登校は一言で言うと“子どもが学校に合わない”もしくは“学校が子どもに合わない”といえます。なぜ不登校が起こってくるか、それは学校に嫌な事があるからなんです。…

「不登校に関する実態調査」（2001年 文部省）のメンバーでもあった講師が熊谷市において実践した不登校半減計画を紹介されました。教育の本来の目的を見据えた上で、不登校を減らしていくための具体的方策を示して頂きました。納得の講座でした。

〈アンケートより〉

- ▶ 大変面白く話を聞かせていただきました。耳に痛い話もありつつ（でも真実だから…。）頑張ろう！やってみよう！という気持ちになりました。

- ▶ 個票について教委で検討いただき、利用できると思う。月に3日以上欠席者の追跡、欠席理由の分析など早期対応の重要性を感じる。
- ▶ 市教委のイニシアチブと言う見方の大切さを感じました。総合的（連携）の視点は分かるのですが、現場の忙しさについて目が移ってしまいました。

◆「軽度発達障害児の理解と対応」

—LD・ADHD等の子どもの指導をめぐる—

東京学芸大学教授 上野 一彦氏

〈講義より〉

障害児の理解は目や耳などの、身体の障害からはじまります。現在、日本では障害認定をし、就労への道をひらくこと等を目的に障害手帳を交付しています。そして知的障害の方々への療育手帳、統合失調障害の方々などへの精神障害健康福祉手帳は3番目の手帳となります。それではこれから話すLDやADHDは4番目の手帳となるのでしょうか。実際にそうなるかどうかはわかりませんがやはり新しい障害として捉えられる必要があります。…

長くこの問題に取り組み、わが国の軽度発達障害研究の第一人者である講師が世界の動向も踏まえ、わが国の特別支援教育のあり方、今後の方向性について解説されました。また軽度発達障害に対する最新の概念を整理した上で保護者への接し方、学級での取り組みの視点、進路問題などにも触れて頂きました。

〈アンケートより〉

- ▶ 軽度発達障害の児童を通常学級に入れてどうやって上手に指導していくかというところをもう少し詳しく聞きたかった。
- ▶ 現場で「支援教育」の説明を聞いてもよく分からないが、上野先生の説明を聞くとよく分かる。しかし、予算面（人的な）での保障がなく、形だけを整えるのは不可能と思う。国が本気で取り組もうとするなら、予算も立て、現場でしっかり取り組める保障をして欲しい。
- ▶ 暖かな人柄を感じた講義でした。最後に語った「障害とは理解と支援を必要とする個性である」という言葉が印象に深く残りました。

◆「心の基礎作り」

早稲田大学人間科学部教授 菅野 純氏

〈講義より〉

不登校問題への様々な切り口があります。色々な問題を突き詰めていくとひとつ社会性の問題につきあたるのではないかと思います。友達関係がうまく作れない、トラブルが多い、人の迷惑が判らないなど様々な社会的な能力、社会性の問題が不登校に限らず現代の子ども達の中に見られます。

今、教育の中で、この子ども達の社会性をどのよ

うに育てるか、さらに困難をその子なりに取り組んで克服していく力をどうつけさせていくか、といった取組の必要性があるのです。…

“心の基礎作り”という一種漠然としたテーマであるにもかかわらず、特に不登校の予防的見地から、それが重要なキーワードとして展開していきます。癒しの感じられる穏やかな語り口の中に講師の確かなカウンセリング理論が展開されました。

〈アンケートより〉

- ▶ 今、持っている子どもの心理に対して、なんとなく捉えていたが、先生の話聞いてすっきりしました。このことで、少しの間は余裕を持って子どもと接することが出来そうです。
- ▶ 心の基礎作りの大切さと社会的能力を育てていくことの重要性をわかりやすく説明され、お人柄の温かさもあり、とても納得できる有意義で素敵な時間となった。学級の子も達へ、心のエネルギーの出る言葉掛けを心がけたい。
- ▶ 子どもの心の土台をしっかりと作ることができるように支援していきたい。育児不安もとても多く、親子で支援していくこと、子どもより親の支援の方がものすごく大きいような気がします。親同士のかかわりもとても難しいです。

◆「学級の人間関係作り」

筑波大学人間総合科学研究科教授

田上 不二夫氏

〈講義より〉

昨今、特別支援教育のことが話題になってきています。昔から目立つ子ども、特徴的な子どもはいたはずですが。急に増えたわけではないと思います。しかし、何故今これほど大変になってきているのでしょうか。それは学級内での人間関係の質が低下してきているのではないかと捉えています。

これまでならクラスに大変な子どもがいても仲間として皆で支えあい、子ども達同士でなんとか折り合いを付けるという学級集団の懐の深さがありました。しかし今はなくなってきている気がします。その中で特徴的な子どもがはじき出され、教師が一对一で対応しなければならないそんな時代になってきているのです。…

実際に対人関係ゲームの演習も行いながら学級の人間関係作りのための理論を解説されました。明るく楽しく学べる講座でした。

〈アンケートより〉

- ▶ (対人関係ゲームは)私も下手ですがいくつか取り組んできました。今はレクリエーションに取り組むことが本当に少なくなりました。私が子どもの頃(昭和50年代)は学校でよくやっていたことですね。昔は意図があったのかよくわかりませんが…。ネタが増えたのでまた

やってみたいと思います。

- ▶ 具体的でとてもよかったです。現場で遊んでいる園児の姿も思い浮かべながらお話を聞いていました。「負けたからやりたくない」と言って面白がれない子にはとても残念で、人間関係の広がりも少ないように思えます。
- ▶ ゲームを人間関係作りに取り入れる具体的な方法が分かり参考になった。田上先生の著書も参考にしながら今後の教育に活かしていこうと思う。

◆「自立とは相互依存のこと」一人を信じて、自分を信じてー

川崎医療福祉大学特任教授 佐々木 正美氏

〈講義より〉

この国は世界で一、二を争う長寿の国です。またもっとも子どもを産まない国でもあります。またペットの保有率のもっとも多い国であります。また一方で年間60数万匹の犬と猫が保健所を通じて殺されています。そして世界でもっとも人間関係、コミュニケーションができなくなってきた国ともいえるのです。大変な時代になったと思われませんか。…

穏やかな語り口の中にも随所に私たち日本人が考えなくてはならない問題を鋭く指摘されました。私たちのこれまでの様々な生き様を考えさせられる講演でした。子どもを育てるとき、人を信じる事、信じられる大人になることを心の底から考えさせられました。

〈アンケートより〉

- ▶ 大切なこと、基本的なことが何なのか伝わってきた。それを実践の中で形成していくのは難しい。その具体的な方策についてこれから学んでいきたい。
- ▶ ままごと遊びの話は正直ショックでした。そんな子ども達がいずれは中学に…。あなたは私を信じられますか…と問える教師、人間でありたいと思いました。
- ▶ 哲学的なお話を各年齢層の特徴が伝わり、現状の把握をこれからの現場がやるべきことを示していただいたと思います。

◆「不登校・ひきこもり」ー精神科医の立場からー

北の丸クリニック所長

(社)青少年健康センター常任理事 倉本 英彦氏

〈講義より〉

クライアントと医者の上に信頼関係がないと継続したかわりにはできません。医師との間の信頼関係づくり自体がカウンセリングなのです。

ある時、自分の反社会的行動を自慢げに話すクライアントを叱ったことがありました。すると彼は驚いて「これはカウンセリングではないんですか」と怒鳴りました。しかしカウンセリングとは何でも許

される場ではありません。

多くのケースに接していて常々思う事はクライアントから学ぶという姿勢が非常に重要だということです。これはどんな教科書を読んでもこれほどの事は学べません。このことは教育現場などでも同様なのではないのでしょうか。…

事例を紹介しながらカウンセリングとはどんなものか、カウンセラーとはどうあるべきか、医療との連携を考える時に何が重要なのか、といった問題にメスを入れられました。精神科医としての長年の臨床経験を基にしたひきこもり研究の成果をじっくりと聞かせてくれました。

〈アンケートより〉

- ▶ “患者から学ぶ”この倉本先生の謙虚な言葉が心に残った。こんなにもご活躍の先生であっても、このような結論を悟られているということ、私も学びたい。もっともっと子ども達のから学ぶ心のやわらかさを持たねばと思った。
- ▶ 若年層対象の精神科の取り組みを直に聞いたことで一般対象の精神科しかない、地方住民として、今後のアドバイスの際、選択肢が増えた点、有意義だった。
- ▶ たくさんの質問に答えていただき、恐縮しました。ありがたかったです。日ごろ、なぜ？難しい？と感じたことに正直にお話をいただき、納得できました。

◆「不登校・軽度の発達障害どう対応するか」

前国立特殊教育総合研究所統括研究官

山形県立上山養護学校 学校長 花輪 敏男氏

〈講義より〉

小学生の頃 ADHD と診断を受けた子どもが中学校に入ってアスペルガーと言われるといったことはよくあります。教育の立場であれば診断名に左右される事はありません。医者によって診断が違ふ事はよくあることです。どのような支援が必要かと言う事を考えればいいのです。教育的診断が必要だということです。またあくまで軽度発達障害については脳機能の障害であるという認識も必要です。…

20年以上この問題に取り組んできた講師が学校で取り組むべき不登校、軽度発達障害の問題について問題の捉え方、家族への対応、本人へのアプローチなど具体的な取り組み方法、技法を解説されました。教員にとって必聴の講座でした。

〈アンケートより〉

- ▶ 具体的に教育現場で役に立つ内容でとても参考になった。机上の理論ではなく、実践に基づいた講演であった。
- ▶ 全てもっともだと思った。納得できた。自信を持てた。先生方はカウンセラーやセンターなどに任せたら良いですとお任せ主義となり、関わ

らない人が多くなり、子ども達は放り出されている。(保健室には入れないという先生が多い、保健室登校は認めないという学校も多い)今日の話聞いて今一度子ども達のために頑張ろうと思った。

- ▶ 〈裏技〉が参考になりました。言い方に左右されたりするのだと…、緊張している人や障害の中身に支援していく方法を学びたいと思います。保育士が言った言葉かけが園児に分かりやすく伝わることは、私たちの課題の一つです。発達や子どもの形態の見方が変わると思いました。

◆シンポジウム〈若者たちが語る不登校・ひきこもり〉一日韓交流を続けてー(大阪会場)

ひきこもりの支援のための生活寮〈みらいの会〉を主宰する野田隆喜氏と〈みらいの会〉の体験者の方々をお招きしてのシンポジウムでした。

〈アンケートより〉

- ▶ 生の声が聞けて、大変良かった。皆に聞かせたかった。きつい話を開示した体験者のみんなの勇気にお礼を言いたい。自分だったら言えない。どの生き方も認められるような社会にしていきたい。
- ▶ いじめ、そして不登校を経験した若者たちの生の声が聞けてよかった。「みらいの会」の取り組みは大変参考になった
- ▶ 恵まれた中で、立ち直っていく人たちだったが、家庭が崩れている中で立ち直れない子ども達がいる現実に、難しさはあるが、関わっていきなりたいと思う。

◆シンポジウム〈体験者が語る不登校・ひきこもり〉(東京会場)

ジャーナリストの池上彰さんをコーディネーターに、体験者の話をじっくり聞いていくシンポジウムです。不登校体験者にはNPO教育研究所の卒業生に来てもらっています。

〈アンケートより〉

- ▶ このような、体験者が語るシンポジウムは初めてで、感動しました。10代に3人とも波乱に富んだ時期があり、大変だったと思います。私自身の10代とは比較になりません。しかし、話を聞いている限り、学級担任は重要なんだと思いました。
- ▶ 不登校をありのまま理解し、支援できていなかった“自分”が発見できました。
- ▶ 体験者の話を聞くのはケースバイケースであり、個々の事例にあてはまらない場合もあるが、話を聞いているだけで参考になるものがあった。共通していることは一人一人大切な一個の人格を持っていること、親の教師の社会のもの

ではないということを感じて持ちました。それが基本であると感じた。

- ▶ 体験者にお話していただくととても胸が苦しかった。一人一人が大事な人なのに、社会、家族が健康的なものに向かえないのが残念です。それでも未来が、明るい未来が必ず来る事を信じます。私たちが今、何が出来るのか、改めて考えていきたいです。

◆【自閉症傾向児、LD、多動児の心理と発達支援】
— 幼児期の指導がきわめて効果的 —

さいたま市教育相談センター所長
国際学院埼玉短期大学 客員教授 金子 保氏

◆【ひきこもりを伴う不登校への対応】— カウンセリングとケースワークの実際について考える —
不登校問題研究会代表幹事・

NPO 法人教育研究所理事長 牟田 武生

H17 年度は国立女性会館（埼玉）でのワークショップ形式の研修会も始めました。少人数で3日間に渡りテーマを絞った内容の濃い研修となりました。

※埼玉会場については個人のプライバシーにかかわる内容まで深く突っ込んだ研修が行われたため、研修内容などの掲載は控えました。

〈一部感想より〉

- ▶ 事例などを通しての解決方法とてもよく分かりました。みなさんからの色々なご意見とても参考になりました。
- ▶ 少人数のトークとても良かったです。先生の身近に皆が集まったのディスカッションとても良かったです。
- ▶ まだまだ勉強不足ですが、目先の対処法だけでなく、また進路や卒業をという1年～3年の期間を意識せざるを得ませんが、焦らずに面と向かって顔を付き合わせて子供、親、家族を支えていけることを目標に学んでいきたいと思えます。

※17年度の講義ノートを送料（400円）でお譲りしています。ご希望の方はNPO法人教育研究所までご連絡下さい。

平成17年度研修会の報告

全参加者数 960名

内 訳

大阪会場参加者	268名
埼玉会場参加者数	51名
東京会場参加者	641名
参加者内訳	
小学校	288名

中学校	193名
高等学校	122名
(中高併設学校については中学で登録)	
養護学校	39名
教育委員会(教育センター・適応指導教室・教育研究所含む)	51名
児童相談所	3名
保育園	60名
幼稚園	105名
その他	
(他の教育機関・施設などを含む)	
学生	14名

※複数会場に参加する方がいるため、参加者内訳の合計と全参加者数が異なります。

☆決算報告☆

①受講料(有料 960名)	¥13,791,500
②平成17年度DM発送準備金	¥2,000,000
③平成17年度パンフレット印刷準備金	¥500,000
④16年度決算終了後活動費	¥200,000
⑤16年度繰越金	¥1,498,756
⑥受取利息	¥3
合計	¥17,990,259

支出の部

①ホール使用料	¥2,002,402
②講師料	¥2,529,997
③講師交通費	¥189,000
④スタッフ用役費	¥3,717,000
⑤ボランティア交通費	¥555,259
⑥ボランティア食事代	¥381,367
⑦通信費	¥2,723,576
⑧パンフレット印刷費	¥529,830
⑨講義ノート印刷費	¥630,000
⑩雑費	¥88,300
⑪事務用品費	¥182,300
⑫事務所経費	¥400,000
⑬支払手数料	¥52,175
⑭租税公課	¥15,000
⑮研究会通信	¥250,000
⑯次年度パンフレット	¥500,000
⑰次年度発送費	¥2,000,000
⑱次年度繰越金	¥1,244,053
合計	¥17,990,259



平成18年度「第16回教師&専門家のための不登校問題研修会」開催致します。

開催主旨

不登校児童・生徒数は教育機関を含め関連機関の対策や努力の結果、平成14年度から全国的に人数及び出現率に於いても減少に転じました。しかし、まだ、予断を許さない状況にあります。不登校児童・生徒から社会的ひきこもりやNEETの若者まで、年齢層の幅の広がりとともに様々な状態の人が存在し、多様な様相を示して来ています。

不登校は“学校を30日以上欠席している”という現象ですが、その中には、虐待・いじめ・学習の遅れ・友達や先生との人間関係・子ども自身の心の問題・親子関係等、様々な問題が含まれています。そのため、不登校問題に対処する時、学校教育、心理、社会福祉、医学、保育、社会学等、広範囲の領域において様々な対応が必要となります。しかし、残念ながら、一領域の対応が現在まだ中心なために、必ずしも効果的ではありません。総合的かつ連携的な取り組みへの理解者及び援助者の育成が急務になってきております。

そこで16年目の今年度は『問題行動の早期発見・早期対応をめざして』をテーマにして、今日の教育課題「いじめ・不登校・学級崩壊・校内暴力やLD・ADHD・高機能自閉症」等の問題を参加者の皆様と一緒に考えていきます。また、今年度は不登校という状態像の中でも、幼児期からの様々な問題行動・LD・ADHD・高機能自閉症の状態を示す、子ども達への対応のあり方を含めて、多くの専門家によってアプローチしていきます。また、より深くカウンセリングのスキルアップを図るために昨年度、大変好評だった埼玉武蔵嵐山でのトレーニングセミナーも開催します。

幼児教育、生徒指導、養護、相談室の先生だけでなく、子ども達に係わる全ての先生方が参加出来るように配慮してあります。また、児童相談所の相談員の方、児童館職員、福祉関係の方々など不登校・ひきこもりや軽度発達障害にかかわる領域で仕事されている方々を参加対象に行います。

講師の先生方は実際の不登校児童・生徒及び軽度発達障害等のそれぞれの専門分野で活躍する我が国を代表する先生方をお招きしております。

受講される皆様が不登校やLD・ADHD・高機能自閉症に関する理解と取り組み(対応)を様々な角度から学び、その実践に生かして頂くことができれば幸に存じます。

日	講師 ※敬称略
7/31	文部科学省初等中等教育局児童生徒課 厚生労働省雇用均等児童家庭局育成課 専門官 鈴木 雄司
	「若者の就労支援とノンフォーマル教育」(仮) 宮本みち子 放送大学教授
	「社会学から見た今日の不登校・いじめ」(仮) 森田 洋司 大阪樟蔭女子大学学長
8/1	「不登校のアセスメントと認知行動療法による具体的アプローチ方法」(仮) 田上 不二夫 筑波大学教授
	「不登校への対応、今問われる対応のあり方」 牟田 武生 特定非営利活動法人教育研究所理事長・不登校問題研究会幹事
	「特別支援教育と軽度発達障害」(仮) 渥美 義賢 国立特殊教育総合研究所情緒障害教育研究部長
8/2	「時間制限カウンセリングの理論」(仮) 上地 安昭 兵庫教育大学教授
	「子どもへのまなざし」(仮) 佐々木 正美 川崎医療福祉大学医療福祉学部教授
	「子ども虐待対応の手引き」(仮) 才村 純 (社福) 日本子ども家庭教育総合研究所ソーシャルワーク研究部長
8/3	「社会的ひきこもりと不登校」(仮) 倉本 英彦 精神科医 北の丸クリニック所長
	「日米中韓4カ国高校生意識調査」(仮) 千石 保 弁護士(財) 日本青少年研究所所長
	「LD・ADHDなどの子どもの指導」(仮) 上野 一彦 東京学芸大学教授
8/4	「子どもを問題行動に向わせないために」(仮) 滝 充 国立教育政策研究所生徒指導研究センター統括研究官
	「幼児期の指導はきわめて大切」(仮) 金子 保 国際学院埼玉短期大学客員教授

☆東京会場スケジュール

国立リハビリテーション記念青少年総合センター・カルチャー棟大ホール

7月31日(月)～8月4日(金)

〈定員700名 講義&質疑形式〉

☆埼玉会場スケジュール

国立女性教育会館(武蔵嵐山)

8月22日(火)～8月23日(水)

〈定員50名 ワークショップ形式研修〉

講師 金子 保 国際学院埼玉短期大学教授・さいたま市教育相談センター所長
牟田 武生 不登校問題研究会幹事・特定非営利活動法人教育研究所理事長